

HAZE

Magazine for MU students

2021 Vol.1 FREE

1



Table of contents

New!? 昭和!? 西武園ゆうえんち	2
“使い捨てカメラ” マニアはかく語りき 飛び切りお気に入りのカメラでシャッターを切ろう	8
あの町に文字を探しに行こう	12
9月になること	17
EDEN	18
小説 「インソムニア」	19
変化する恋愛観	28
小説 「夢の境界線」	34
ブラックホワイタルバイト	38
岡本太郎と僕	45
編集後記	48



新しいのに、どこか懐かしい。

2021年5月19日にリニューアルオープンした西武園ゆうえんち。

新しいテーマ「懐かしさ」が満載の場内は、1960年代の熱気が溢れ返る。

ニュー？ 昭和？

西武園ゆうえんち





毎日 15 時に行われる
ウギウギ祭りに用いられる車



昔懐かしたばこ屋さん



夕日の丘商店街
チケットを購入しゲートをくぐるとすぐ目の前に夕日の丘商店街が迎えてくれる。
商店街には昔懐かしい喫茶店や駄菓子屋、金物屋や写真館など様々なレトロな店が立ち並び、レトロな服で訪れ写真を撮るのもよし、昭和のキャストと一緒に雰囲気を楽しむのもよし、子どもも大人も多種多様な楽しみ方ができるのが西武園の良さのひとつだ。



八百屋で行われるバナナのたたき売り



まるで本物！新鮮な魚が並ぶ魚勝

編集部がキュンときた！ 西武園ゆうえんちの可愛いフードたち



◀駄菓子 夢見堂
パインアイス りんご飴アイス
暑い季節の食べ歩きにぴったり。

▶喫茶ビクトリア
上京カツサンド
喫茶店に来たら食べたい一品。



夕日の丘商店街

夕日の丘商店街には昔懐かしい喫茶店や駄菓子屋、金物屋や写真館など様々なレトロな店が立ち並び、レトロな服で訪れ写真を撮るのもよし、昭和のキャストと一緒に雰囲気を楽しむのもよし、子どもも大人も多種多様な楽しみ方ができるのが西武園の良さのひとつだ。

商店街のゆかいな住人たち。

この夕日の丘商店街には個性的な住民が住んでおり、フラッシュモブの様にイベントが催される。唐突に始まるイベントに物珍しさに集まると、キャストたちの熱気とテンションに巻き込まれ、子ども心に戻って楽しむことができる。この夕日の丘商店街に長時間滞在すると、様々なイベントに遭遇することができるのでおすすめです。

リニューアルした

西武園ゆうえんち

昭和にタイムスリップ！



タイムスリップは
エントランスから！

最寄り駅である西武園ゆうえんち駅を出ると、昔ながらの広告が目に入る。パーク内のアトラクションが昭和の映画ボスターの様に並び、遊園地に入る前から圧巻だ。この広告の下には当日券と西武園内通貨である『西武園』が購入できる。



西武園ゆうえんち内通貨『西武園』



西武園ゆうえんち当日券

西武園ではなく、西武園。

かつての1円がお札であったからか、10園札、100園札のものにも懐かしさを感じる。当日券は観覧車やリニューアルの目玉である夕日の丘商店街の灯籠をモチーフにしたものと、リニューアル前から夏休み限定で打ち上げられている花火があしらわれている。花火の部分は季節によって変わるのだろうか。

10園札、100園札には違う絵柄が書かれている。
表面は西武グループが所有している野球チーム西武ライオンズのキャラクター、レオが書かれており、10園は子どものレオ、100園は大人のレオが描かれている。10園札の裏面は観覧車、回転空中ブランコ、100園札には新アトラクションの「ゴジラ・ザ・ライド」を体験できる夕陽館が描かれている。

園内での飲食、体験、お土産はこの西武園がないと購入することができない。しかし、飲み物は現金で購入することができ、アトラクションも入場券があれば乗ることができるので、購入するかどうかは個人の匙加減だ。ただし、購入することで楽しみが増えるのは間違いないだろう。



◀喫茶ビクトリア
クリームソーダ
緑を含んだ4色展開！
昭和レトロの真骨頂。



◀ビヤホール 舶来グリル
燻製サーモン・サンドキッチ
半屋外でいただくグリル料理は、お酒との相性抜群！





楽しいのは、
昭和に限らず。



土管ってなぜか
のぞきたくなる……



夕陽館

この夕日の丘商店街の入り口を左に進み坂道を上ると、夕陽館にたどり着く。

建物に入ると赤い絨毯の敷き詰められた廊下に、様々な映画の広告がかけられた壁が目に入る。新しい建物だが、どこか古さを感じるレトロな建物だ。

夕陽館の中には、今回のリニューアルで商店街とともに新しくできた「ゴジラ・ザ・ライド」というアトラクションがある。実際の映像や廊下



館内の廊下の壁にかけられた映画の広告たち

以外の写真撮影は禁止であるため、アトラクションの写真を載せることはできないが、まるで本当に怪獣たちに襲われているかのような恐怖と、空を飛んでいるかのようなスリルを体験することができると、まるで自分がその場にいまするような気持ちでゴジラを応援すると、何度乗っても飽きなくて楽しい。一番人気のアトラクションであるため、お昼ごろやヴギヴギ祭りなど人が他の場所に集中している時間に並ぶことをおすすめする。画面酔いには要注意だ。



令和に突如現れた昭和の街と、最新アトラクションがそろった西武園ゆうえんち。夏の期間はゆうえんちの入場券を購入することで、プールにも入場することができ。プールでは大水合戦というホースや水鉄砲を使った水合戦のイベントや、夜はナイトプールと大花祭りという花火の打ち上げが行われている。冬の期間はプールがスケート場になり、冬は冬の楽しみ方を期待することができる。昭和にタイムスリップして、住民の熱気、懐かしい街並み、そしてアトラクションを通じて感じる非日常感を体験しよう。

LET'S
WEO
昭和!



何より良いのが「写り」である。スマホのカメラでは出せないレトロ感や色合いに、なんとも言えない良さがある。使い捨てカメラをやめられない中毒性がある。レトロ感というのも、画質が良すぎないのが良い味を出すのだろう。最近は一スタグラムのエフェクトなどでもフィルムカメラ風のもので登場しているが、やっぱり本物には敵わない。

使い捨てカメラで有名な「写ルンです」は、使ってみれば人気がある理由が分かるはず。他の使い捨てカメラも良いが、これが一番好きだ。赤や青、緑などの色味が濃く出るところが良い。その色味も、例えば赤だと、完璧な赤ではなくて、少しオレンジがかった赤や朱色っぽく写ったり、目に見える色とは少し異なって現像される。

フラッシュを焚くか、焚かないかで写りが全然違うのも面白い。



フラッシュを焚くと色が強く出るが、焚かないと淡く柔らかな印象の写真が撮れる。ただ、フラッシュは相当明るい場所じゃない限りは焚いた方が良くと思う。色がボケて、綺麗な写真が撮れないから。



FUJIFILM [写ルンです SIMPLE ACE]

初期モデルデザイン。王道ミドリ。



FUJIFILM [写ルンです SIMPLE ACE]

※現在はこのパッケージデザインは売られておりません。



Kodak [FUN.SAVER]

カメラのフォルムと色が最高にカワイイ。

今や、高校生は当たり前前、小中学生すらスマートフォンを持つ時代になった。10〜20代は、デジタルネイティブと呼ばれる世代だ。スマホで日常の写真やムービーを残すのは当たり前前、便利な生活を送っている。

そんな中、友達に勧められて使い始めた「使い捨てカメラ」。現代ではあまり馴染みのなくなったアナログなもの。



使い捨てカメラは買ってすぐに使えるのがいい。

近くにカメラ屋さんやドンキホーテなどがあれば、思いついた時すぐに購入できる。コンビニにもたまに置かれている。とにかく手に入りやすい。旅先、遊び、デートでも。

購入したら袋を開けて、カメラを取り出し、ソッコー撮影。「ハイ、チーズ！」フィルムを自分でセットするタイプのカメラよりも、簡単に使えるのがいい。

電池もいらぬ。購入したら誰でもすぐに使うことが出来る。小学生でも簡単に使えるからか、小学校の修学旅行では班にひとつ、使い捨てカメラが配られるところもあるようだ。

チャレンジしやすい値段設定がいい。なんと、ひとつ1200円程度で買えてしまう。モノホンのフィルムカメラを買うとなると、良いものは何十万円もするだろう。

中古で安く買うこともできるし、最近は一リーズナブルなフィルムカメラも登場しているが、それでも1200円では買えないと思う。やっぱりフィルムカメラ入門として、使い捨てカメラの手の出しやすさは抜群だ。

「スマホ以外のカメラ、チャレンジしてみたかったんだよね。」
そのあなた、使い捨てカメラ、超オススメですよ!!



楽しいのは撮影だけではない「現像」。
撮影し終わったカメラをそのままお
店に持って行くだけ。（お店で済ませ
るのが無難だが、他の方法もあるのか
もしれない。）現像するお店によって

現像後の写真の出来が変わるので、お
気に入りのお店を見つけることをお勧
めする。初めて現像する人は、利用客
が多い繁盛しているお店などは現像結
果が安定している確率が高いので、そ
のようなお店を選ぶと良いだろう。

店員さんにカメラを渡して、現像後
写真が返ってきたとき、とてつもなく
嬉しい。ワクワクする。というの
も、使い捨てカメラは現像するまで撮
った写真を見ることができないので、
撮っている時は、うまく写っているか
すら分からない。使い捨てカメラ歴が
長くても、袖が写真の角に映り込んで
しまったり、フラッシュを焚き忘れて
真っ黒の写真が現像されたりする。だ
からこそ、上手く撮れた写真が沢山あ
るときはとても嬉しい。すぐに次の使

い捨てカメラをついつい購入してしま
うのだ。

日中、思いがけない飼猫の振り向きを瞬間を
パシャリ。



雨の日。奥に見えるネオン街を背景にした写
真。フラッシュで、見えるものが変わる。



「これが僕らのフィルムカメラ」



街を歩いていて、綺麗な花が咲いて
いたらパシャリ。ランチをしている友
達の美味しそうな顔が可愛いからパシ
ヤリ。
何気ない生活の中で、特別なイベン
トの中で、「いいな」と思った風景や
瞬間を、使い捨てカメラで切り取るこ
との楽しさを、多くの人に知ってほし
い。
スマホカメラで撮った写真よりも何
故か特別で、何となく大切な一枚にな
ったりする。そして、使い捨てカメラ
を使うことで、毎日が少し特別に感じ
られたりするかもしれない。
みんなの人生のスパイスに、「使い
捨てカメラ」なんてどうだろう？



あの町に文字を探しに行こう。

蔵前篇

「浅草御蔵前書房」

街には面白い文字が溢れているのだ。

それに気が付くと、街を歩くことが各段に楽しくなる。ライフハックと言ったら大袈裟かもしれないけど、それくらい街の中の「文字」に注目するのは面白い。

今回の舞台は、蔵前。

都営浅草線の蔵前駅ちかくを散策していると、圧倒的に目を引く看板に出会った。



きよろきよろと街の景色を見ながら歩くことが好きなひとは、思わず足を止めてしまいうだろう。

少し消えかかった文字。看板の下には、看板が落ちないようネットが張ってある。少し傾いた風情漂う建物は、隣のビルに寄り掛かっているようにも見える。そして、店内にぎつしりと詰め込まれた本の数々。

危なっかしさや不安すら感じるが、その状態のままだと残そうとする「価値」を、それは十分に帯びていた。惹き込まれる要素しかない。

ついついお店に立ち寄ると、優しい店主がお話を聞かせてくださった。



店名の こだわり

この建物と看板は昭和23年にできたもので、(おそらく)戦後まもなくの初めての2階建て建築だそう。73年もの間続く古書店。なるほど、この趣。建物は*看板建築の一種で、木造建築。これも目を引く魅力のひとつだろう。

*看板建築。

平らな壁面に銅板やタイルが貼られた木造の商店建築のこと。横から見ると、建物正面がほぼまっすぐなのが特徴。神田神保町辺りに多く残っているようだ。

「浅草御蔵前書房」という店名

思わず口に出したくなる名前。しかし、読んでいる方の中には「おくらまえ」なのか「みくらまえ」なのか、迷っている方もいるだろう。ちなみに答えは「おくらまえ」。御徒町や御茶ノ水には馴染みがあるけ

看板の こだわり

「浅草御蔵前書房」という看板

私が惹かれたこの看板。「大江戸大東京関係 相撲文献」「浅草御蔵前書房」の文字。

江戸文字の中に、相撲文字という字体があることはご存知だろうか。その前に。江戸文字とは、江戸時代に盛んに使用された図案文字の総称を指す。寄席文字や髷文字は見たことがある人も多いだろう。そんな江戸文字の中に、相撲文字という書体がある。

このお店は相撲文献を多く取り扱うこともあり、看板の文字は「相撲文字っぽく」書いてほしいと、看板屋さんをお願いしたのだそう。この建物は昭和に建てられたものだが、相撲文字によって、この古書店はよ

ど、「御」が蔵前という地名の前に付くのはめずらしい。

現在の蔵前辺りには、昔、米の蔵があり、そこから蔵前という地名がついたと言われている。「御蔵前」という言葉があったわけではなく、「御蔵」という言葉があり、そこから派生した。これは、「おくら」とも「みくら」とも読むことが出来る。それを店名に用いたのだそう。「御がつくだけで古めかしく感じられるから、なんかいいよね!」と店主。ユーモア溢れるお人柄だ。

店名には、「蔵前」の前に「浅草」という地名がもうひとつ。これはなぜか尋ねると、「浅草という地名にはブランド性があり、分かりやすいから」とのこと。たしかに浅草って有名ですね。今の店名以外に「浅草蔵前書店」などの候補もあったそう。

ちなみに、このお店の前の大通りは昔、浅草寺の参道だったようで、当手を想像しながら歩くと蔵前の散歩がより楽しめるかもしれない。

りレトロっぽさを帯びているのだ。店主によると、書体も商売につながる大切な素材のひとつなのだという。

寄席文字
相撲文字

寄席文字 相撲文字

9月になること

吉田 祐志

古本屋さんは魅力が詰まっています、あるとついつい寄ってしまうのだけど、店主にお話を聞くことができる機会はなかなか無い。私の質問に店主は快く答えてくださり、本当に親切さに感動してしまった。店主のアンサーはどれもこれも興味深いものばかりだ。

Q お店には何冊位の本があるのですか？

A 大体10万冊くらいある。一階だけでなく、二階にもたくさん本がある。実際、一点付けの本たちを管理するのは相当大変で、数えたことがないから冊数は正確には分からない。でも、「10万冊」って言うっておけばたくさんあると感ずるでしょ！ 宣伝文句として10万冊と答えています（笑）

Q 古書の価値はどのように決まりますか？

A 自分が思うに、奥付↓内容や著者↓流行の順に決まると思う。この三つが大事な要素。本にも時折々の流行りがあったて、古ければ良いってものじゃない。本は定評が大事なんだよ。

古本屋の営業に余裕があるときに良い本を沢山買って、流行りが来るまでじっくり待つ。流行しているタイミングで売るのがポイント。

Q 古本屋という職業の魅力を教えてください。

A 自分の知識で仕事ができること。広く浅く沢山の知識をつけることが必要。一生勉強だよ。

古本屋はセンスが無いと続かない。古書売るときは、自分で勉強して得た知識から生まれる価値観を、お客さんに共有することが大切。それが本の付加価値になる。

今回は蔵前で、すてきな文字とすてきな人との出会いがあった。いつもは何気なく歩く道にも面白い要素は沢山潜んでいる。「文字探し」はその第一歩。文字も、文字以外でも、気づけたらきつと楽しい。探さないといいものはない！
あなたの所縁の街にもきつとある。あの街に文字を探しに行こう。

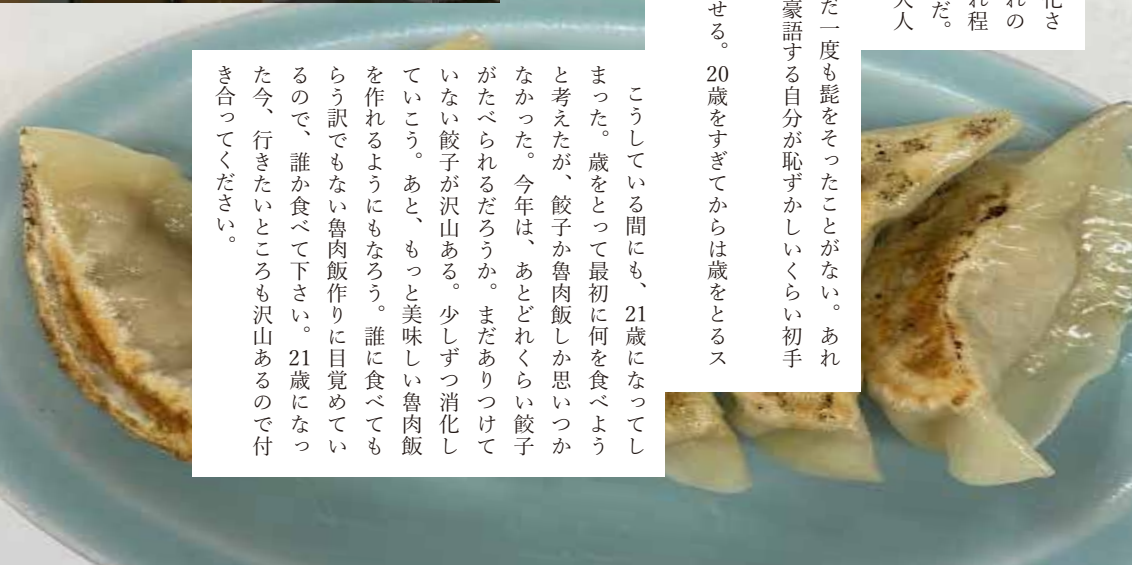
ま

た月が変わった。今年の夏は遊びたいと息巻いていた7月は、いつの間にか消化された。家の外にある赤の点滅信号は等しく繰り返して点滅している。赤は止まれの信号、しかし点滅信号なら一時停止で進んでいいようだ。今年とつたはずの免許であれ程勉強したが、それもすっかり忘れていた。免許をとった今年の春さえ、もう既に昔のようだ。止まらない時間軸に作用されて僕らも少しずつ大人になっていく。はたして、本当に大人になっているのだろうか。

ここだけの話になるが、僕はまだ一度も髭をそったことがない。あれほど周りにイケオジになりたいと豪語する自分が恥ずかしいくらい初手の Beard が早いと聞くがその通りだ。

去年の自分と今の自分を照らし合わせる。20歳をすぎてからは歳をとるス

こうしている間にも、21歳になってしまった。歳をとって最初に何を食べようと考えたが、餃子が魯肉飯か思いつかなかった。今年は、あとどれくらい餃子がたべられるだろうか。まだありつけない餃子が沢山ある。少しずつ消化していこう。あと、もっと美味しい魯肉飯を作れるようになろう。誰に食べてもらう訳でもない魯肉飯作りが目覚めているので、誰か食べて下さい。21歳になった今、行きたいところも沢山あるので付き合ってください。



EDEN

ユートピアと夢見るものは ゆうことだけはピュアだった

誰しもがたどり着くことができない

理想だけが膨らみ 奇怪な思いを募らせる

科学が進んだ現代さえ 創られることのない郷

表があれば 裏があり 理想郷がある世界にも裏切りが生まれる

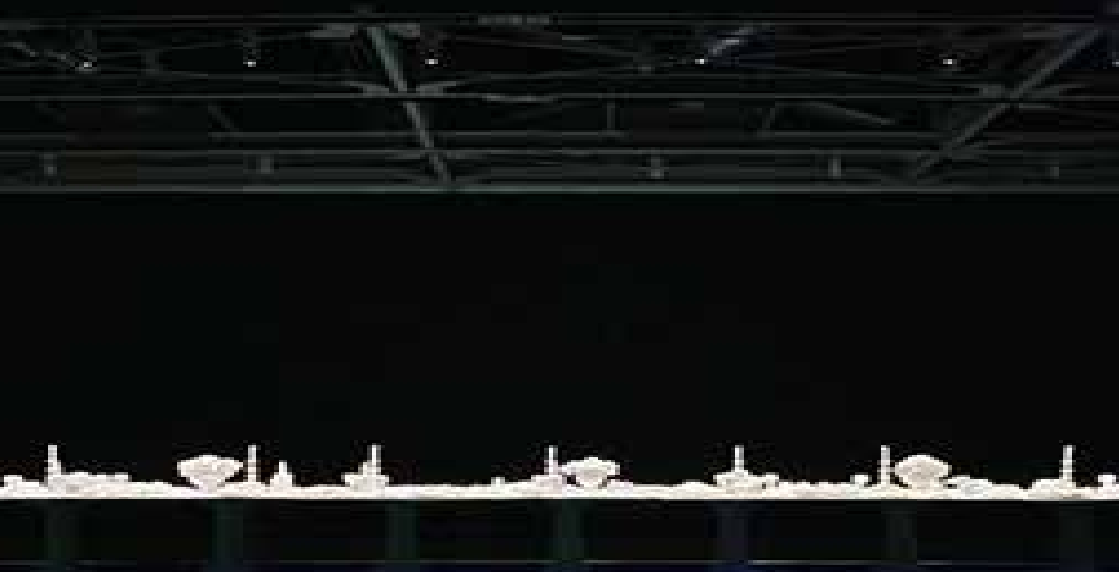
裏が黒で表が白であるという認識はここで捨ててしまおう

どこかで泣いている人がいれば どこかで笑っている人がいる



インソムニア

吉田祐志



僕は、曜日を消滅させることで寝ることができなくなった。これは、決して悪魔との契約でも単なる不眠症な訳でもない。ただの思い込みな訳でもない。

彼女とメールでやり取りをしていたある日。仕事でお互いに会えない日が続いていた僕は、今週ようやく会える日が決まっていた。

『あと二日で、会えるねー』

『そうだね、仕事も頑張れそう』

『会えるまでの木曜日と金曜日なんて無くなっちゃえばいいのに』

彼女の返信に僕はつい頷いてしまった。そもそも、週など決めてしまうから、曜日の区切りを作り会える日というものをも固定してしまうのだ。曜日なんて消滅してしまえばいい。僕は、そう思いながらベッドにある多量の薬箱を退かして寝転んだ。電球の切れかけた天井を見ると、不規則に光ったり

通勤した。キャッシュレスの時代で、頑なに小銭を沢山入れた財布を持ち歩いていた。搾取されているのではないかと心配になるので銀行にお金を預けることにも抵抗があった。

満員御礼を表示したような電車内は、生気を帯びていない人で溢れていた。マスクでメガネが曇っている中年のサラリーマン、寝起きそうな髪の毛の乾いていないOLの女性、必死に立ちながらスマホでゲームをする男子高生。毎日乗る電車で同じ号車に乗車しているので、ある程度顔を覚えることがあった。

人間には、幸せが必要だと常々思うことがあった。私の経験上だが、全盛期の幸福感を持ち合わせていた時の僕は、表情や顔付きも段違いで活き活きしていた。しかし、この車内には見渡す限り幸福感を持つ者はいなかった。どんよりとした空気は、マスクというフィルターを通して吸っても浄化されることはなく、重たい空気として自分に取り込まれる。この空気を吸うことで自分までも不幸になってしまうのではないかと思い、なるべく息を殺して勤務先の駅まで堪えた。

勤務を終えると、友人と約束をしていたので新宿駅に向かった。この駅はいつまで経ってもスムーズに通り返けることが

消えたりを繰り返していた。この一週間あまりご飯を食べた記憶がない。一人暮らしをしていると、食べることも億劫になり、コンビニに行くことがまるで県外に行くことのように遠く思える。限界を通り越すことで空腹は無くなり煙草でこまかすことができることを知った。

次の日になると、普通の顔をして仕事場に向かう。低血圧な僕は、朝が一番嫌いだ。朝日を浴びることで健康になると聞いたことがあるが、不健康な生活をして健康を疎外している自分にはお門違いな話だ。健康をすり減らした僕の身体は、太陽の光を浴びたところで何かを吸収したり、回復したりすることは無いだろう。寝起きの無造作な髪を洗面台で軽く直し、スーツに着替えた。一服した後、壊れかけの鍵穴に苦戦して鍵をかけ、駅へ歩いた。

今日は、改札前で定期を忘れたことに気づいた。本当についでいない僕は、財布から渋々小銭を出して切符を購入し、

できない。人の波に飲まれては、出口にたどりつけない。冷や汗をかきながら、あたふたと友人と合流した。

「ここの臭いはいつまでたっても慣れないなあ」

都会に慣れていない友人には新宿の臭いがどうやら耐えられないようだ。僕からすれば、嗅覚が麻痺しているのか、どうとも思わなかった。

「さぞかし、地元の空気は美味いだろうね」

少し見下されたように感じたので、皮肉混じりに答えた。

僕は、東京という街が好きだった。一応都民として生まれたが、区外育ちなので都会に憧れを持つ地方民の気持ちも理解できた。しかし、憧れる理由は少し違うようだった。

有名なお店がいっぱいある、色々な人に出会いたい、夢が叶えられるなど、希望を胸に上京する子が地方では多いだろう。僕の場合は、キラキラとした眠らない街と人やゴミで汚れた表と裏の姿に美しさを感じていたからだ。ネオン街や巨大な大都市の電光掲示板をぽかんと口を開けて少年時代はただ傍観していた。幼い頃は、東京の裏路地や暗い場所には、親から行くなと言われていた。ある程度の年齢になり、東京の裏路地にある居酒屋などを訪れてからは、印象が一変した。

一般的には、この時点で良くない印象を持つだろうが、表では綺麗に着飾られているが裏では知られたくない過去や黒くくすんだ記憶を道化になりすまし隠した東京に対して愛おしく思うようになっていた。まさに、僕にそっくりだ。

友人とは、大学生からの仲だった。友人とは、学生時代から飲み歩いていたが、僕のこのような至んだ思想も受け入れて話を聞いてくれた。きつと、あまり何も考えず、直感を信じて生きてきた人なので、話にも深く言及せず、軽い気持ちで聞いてくれていたのだろう。

しかし、僕にとってはそっちの方が都合だった。僕の思想を一語一句受け取るように聞かれていては、嫌われるどころか、相手の気分を沈めてしまいうに違いない。この歳になっても、友人は笑って僕の話聞き流してくれていた。同族ではない僕には嫌悪を覚えていないようだった。

「お前、今の彼女とどうしたいの」

普段は自発的に発言してくれない友人が言った言葉に少しお酒の酔いが覚めた。顔を覗くと、酔っ払って頬を赤らめていたが、目はしっかり瞳孔を開いてこちらを見ていた。

「いきなりどうしたんだよ」

車に乗った。今日は木曜日で、明日も仕事があるが、気分的に各駅停車に乗り、端側に座った。

僕の悲観的な性格は、一体どこから構成されたのだろうか。家族が影響していることは、一番妥当ではあるがここで話すことではないので伏せておこう。この歳になつてまで、反抗期の子のように育てかたが悪かった、こんな家に生まれたからだ、などとは言いたくなかった。

『うとうとしていると、最寄り駅に着いたアナウンスと共に、反射的に立ち上がった。寝てしまっている、起きたら必ず朝ではないことに、少し疎ましく感じながら、改札を出た。寝ても覚めても、朝が来ないならばいつそのこと寝ることすら面倒になってしまふ。二十四時間ある一日を僕は少し短いと感じている。寝ている時間に僕は一体何ができるのかなんて考えていれば、もう寝ることに抵抗を覚えてしまっていたのだ。流石に周りに心配されたことで、病院に行き、睡眠導入剤や安定薬などを処方してもらっていた。抵抗はするが、体の疲れと精神面の体力とは差が激しく、いつまでも学生のように元気でいられるほどの若さは無かった。』

終電前の改札には、色々な光景が見えた。オンライン授業

友人の発言に少し動揺していた。どうしたいのか、などと言われても現状打破することもなく凹凸のない彼女とは付き合っているが、この先を考える歳になってきたことは少し感じていた。

「実は、この前婚約したんだ」

なるほど、そういうことか。ついに友人にマウンツを取られ、一歩先を歩いていることを知った。僕は、君はずるずる今の彼女と過ごし、先も見据えずに結果を恐れているんじゃないのか、と言われていた気がした。

僕の考えでは、結婚は人生の墓場だと思っている。ある種の妥協で、伴侶を決めているように思ってしまう。やり直し方などいくらでもあるだろうが、なるべく荒波を立てずに生きていたいタチの人間なので、簡単に物事を決めることが出来なかった。幸せを噛み締めることは、必要ではあるが僕の人生において、結婚という物語は書かれることはきつとないだろう。

「そっか、幸せになればよ」

他人の幸せには悲観的ではないので、純粋に祝福したつもりだ。居酒屋を出ると、友人とは駅の改札で別れ、帰りの電

で明日を考えずに飲み歩く学生たち、改札前で最後の別れかのように地団駄を踏みながらイチャイチャしているカップル。さらに、改札を出て横を少し覗くと、地面に座り込みワンカップを手で持ちながら独り言をぶつぶつと呟くアル中末期のサラリーマンの姿があった。こんな男にはなりたくないが、自分の部屋を思い出すと呆れてものも言えなくなっていた。

帰り道は、少し大きめの公園を通過して帰っている。休日の日中であれば、子連れの家族が遊具やゴーカートで遊んでいる、テニスコートではお年寄りがボケ防止の為にスポーツを繰り返していた。しかし、深夜の夜ともなれば、静けさで虫の鳴き声が鮮明に聞こえた。砂利道を歩く足の音が自分だけではなく、後ろからも聞こえるとしこし怖くて振り返り、警戒しながら帰ることもあった。

アパート前にあるコンビニに寄ると、いつも馴染みのある夜勤の男がいた。髪の毛は無造作で髭は所々に剃り残しがあり、メガネから見える目は細過ぎるのかペンの一本線のように、まさに今起きましたと顔に書いてあるような見た目をしていて、声にも張りがなく、文章で打てば、語尾の伸ばし棒が三本付くくらいの気怠いトーンだった。夜勤だしこの振る

舞いでも問題は無かったが、他の勤務帯であれば、間違えなくクビになっているだろう。

名札を見ると、『和地山』と書いてあり、いつも『わちやま』か『わじやま』なのが気になり、これが原因で寝られなかったこともあった。聞くほど親しいわけでもなかったので、切れたタバコの番号を言つて購入し、そのまま立ち去った。「ありがとうございましたー」

いつものように、和知山のやる気のない声が後ろの方から聞こえた。

築二十年落ちの月五万のアパートは、深夜ではあるが明かりが多く付いていた。三階まである階段を登ろうとするが、毎回登るまでの階段の電灯が切れかけていて、五秒に一回のペースで電気が落ちては付いてを繰り返していた。暗くなる前に帰れば、このアパートの仕様に困らなくて済むが、いつもあとで気づいてこのザマだった。

三階まで階段を踏み外さずに登り終えると、家の鍵をカバンの中から探す。いつもなら小さいポケットの中に入れていたはずだが、そこには鍵が入っていなかった。五秒に一回く

る電気の仕様でカバンの中を目視することができず、手で必死に底まで探った。カバンの中には感触だが、レシートや小銭、ガムの包み紙など多くのゴミがあり、探すことも一苦労だった。ゴミの奥を必死に漁り続けると、明らかに温度の冷たい金属物を見つけた。ようやく鍵を見つけ出し、錆び付いたドアノブに鍵をさした。鍵を開けるにも一苦労な築二十年は、鍵を押したり少し引いたり調節しながら、鍵を開けなければならなかった。

朝ぶりに帰ってきた自宅は、一見綺麗には見えているが、収納などはごちゃごちゃしていた。机の上には、相変わらず多量の薬と昨日の飲みかけの缶ビールが放置されていた。

シャワーに入るために、洗面台でスーツを脱いだ。洗面台で自分の目と焦点があった。鏡に顔を近づけてみると、知らないうちに目の下に黒く、くすんだ目のくまができていた。近頃、自分の顔を確認することがなく、身体に出ている疲れを目で実際に見ると、どっと疲れが出てきた。年相応の顔付きをした自分を隠すように、洗面台の収納を開けて鏡が見えないようにした。

シャワーを終えると、部屋干したままのタオルを取りに濡

れたままでリビングまで歩いた。タオルを取り、振り返ると自分が歩いた足跡が無数の水溜まりのようにあった。小学校の頃に、足で雑巾を使って掃除していたように、タオルを床で滑らして水滴を拭いた。その後に身体を拭くタオルだと気づき、少し後悔した。

ドライヤーは、五年以上使っている愛用品だった。スイッチを入れると、後ろのファンの部分からおかしな異音がしていた。古くから使っているものには、妙に愛着があった。僕は、何事も新しいものに切替える時にはリスクがあり、危ない橋を渡って新しさを求めるよりも知っている道を通して、安定を求めるタイプの人間だ。

そして何よりも新しい物を買いはするが、説明書という存在がかなり鬱陶しい。ゲームのカセットやおもちゃに必ず付いてくるであろう薄っぺらい紙を僕は絶対読まなかった。理由は、面倒であることは勿論だが、自分自身の探究心をすでに答への書かれたもので解決しなくなかったからだ。知ってたまるか、という反骨精神が幼い時から始まり、大人になっても継続していた。』

なるべく顔を見ないようにしながら歯を磨き終えると、時

刻は一時を過ぎていた。明日の支度は明日の自分に任せることにしたので、処方されている薬を机に残った昨日の炭酸の抜けた不味いビールで飲み干した。この薬の効果はすごく強いので不眠症の僕にも効果観面だった。今まで薬を何度か変えて、慣れてしまった薬が多くあり、耐性ができると睡眠薬の効果を成さなくなった薬が大半だった。

目を閉じてどのくらい経っただろうか。そんなことをふと思ひ、目を開けると見知らぬ間取りの家の一室の空間に居た。視点を自分に移すと、ダイニングテーブルに座ってぼつんとしていた。時間は早朝だろうか、カーテンの隙間から日差しが差し込んでいた。ダイニングテーブルには四つの椅子があり、明らかに二つは子供仕様になっていた。驚いていると、後ろから料理を運んできた彼女の姿があった。

「朝ごはんできたよー」

扉の奥から足音が聞こえると、二人のそっくりな子どもが勢いよく椅子に座ってきた。ワクワクしたような仕草でこちらを見つめていた。

お父さん、今日は久しぶりのお出かけだね」

一度は理解に追い付いていなかったが、とりあえずその場

の回答では明るく返事をした。どうやら状況を整理すると、今付き合っている彼女とこの世界では結婚していて、双子の小学生程度の子どもがいる設定だった。せっかくなのでこの世界を楽しむことにした。身体は都合よく自分の意思とは別で動いてくれていた。朝食を終えると、この世界では妻と呼ぶが、片付けを妻がしている間に息子たちとどこに行くのか話した。

「ぼくたちは、遊園地に行きたい！」

双子で意思疎通が取れているのか、仲良く同時に答えた。

二人は顔がよく似ていて、どことなく自分と似ているような気もした。この世界では、自分のような大人になって欲しくない切実に思った。僕のように汚れた世界など知らずに、綺麗なこの空間で生きていることに喜びを覚えた。

着替えを終えて、玄関を出ると横にはしっかりとしたファミリーカーがあった。実際の僕は免許を持つてはいるが、普段は乗る機会があまりなく、ペーパードライバーそのものだった。しかし、よくできている世界なのでベテランドドライバーのようにすら運転することができた。車の助手席には、妻が乗っていて、後ろの座席には、仲良く双子がお菓子を食

眠っていた。家に帰宅し、二人を部屋まで一人ずつ抱えてベッドに寝かせた。

お風呂を終えて、寝室に入るとすでに妻がいた。

「今日は運転ありがとう、お疲れ様」

妻は笑顔でこちらを見つめていた。彼女の優しさは現実の世界とは変わらず、いつでも味方でいてくれた。

「お礼を言うのはこっちの方だよ」

彼女は不思議そうにこちらを見ながら、頷いてくれた。この世界ともお別れしてしまうと察した僕は、彼女にお礼を言いきり眠りについた。

目を覚ますと、身体中が眠りすぎたせいなのか凝り固まって痛かった。身体中が少し重く、寝疲れしていた。外は明るいところか薄暗かった。枕の隣などを無造作に探して見つけ出したスマホの電源ボタンを押すと、夜の十九時だった。曜日は金曜日であり、通知画面には、会社から何度か電話がかかっていた形跡があった。

どうやら、薬が効きすぎたせいか、一日中眠っていたらしい。さつきまでの出来事が、現実ではない夢であることは知っ

べながら到着を心待ちにしていた。家族という存在を今まで実感したことがなかった僕には、急遽だが家庭を持つ出来事に戸惑いはあったが、何故か心地よかった。

遊園地に着くと、どこか見覚えのある雰囲気があった。幼少期の等身大の僕とは視点が違うので、最初は分からなかったが、この遊園地は唯一母親と訪れた記憶がある遊園地だった。古びたメッキの剥がれかけているメリーゴーランドの馬が当時と同じように残っていた。当時の僕が、食べていたソフトクリームを息子たちが同じように食べている姿に自分が重なった。幼少期の幸せな思い出とこの世界の幸せがリンクしたことで、きつとこの遊園地にたどり着いたのだろう。普段生きている世界では気づくことができなかったことに少し気づくことができた。

笑顔で無邪気にメリーゴーランドに乗っている双子の姿を、妻と同じように微笑ましく見つめていた。用意してくれていたお弁当をベンチで食べ、アトラクションを楽しんでいると、すっかり夕方になっていた。帰りにファミレスで夕食を終え、帰りの車では、疲れ果てたのか、後ろから双子のいびきが聞こえていた。ミラーを確認すると、すやすやと頭を合わせて

ていたが、ここまでの睡眠時間だったことには驚いた。会社の同期からも心配のメールがあり、迷惑かけたことは申し訳なかったでメールで安否確認の返信を送った。

すっかり熟睡して眠さの一つも感じなかったので、明日の夜に会う彼女との時間まで起きていることにした。土曜日の日付になり、映画を見ながらカップラーメンを食べた。普段ならば、不眠症であることが悩みではあったが、長い幸せを感じることができたので、不眠症であることも悪くないと思い始めた。現実ではなかったが、遠い先ではない未来を見据えることができたことで、少なくとも僕は、インソムニアであることを前向きに考え、薬をゴミ箱に投げ捨てた。

変化する 恋愛観

特別コラム
vol.1



こわっばの
恋愛偏見記

人を好きになるということ
だんだん変わっていく心に

情熱的な恋をして、愛され、結婚する。

そんな典型的な恋は散々ドラマで見えてきたし、私達ミレニアムベビーと呼ばれる世代は、それ以外のちよつとスパイスの効いた恋愛さえ経験してきた。もちろん創作物だけ。

創作物だと言い切ってしまうのは、スパイスの効いた恋愛の多くは非現実的で、女性にとって理想的なものがほとんどだから。もちろんちよつと変わった恋愛のエッセイなんかもあるが、恋愛的思考の多くは創作物を参考

にして培われたものが多いだろう。漫画やアニメより先にエッセイを読んだ子供など聞いたことがない。

しかし、恋愛というジャンルで造られているものの多くは男性ウケが悪い。というのも、女性の理想と男性の理想は同じでない部分が多いためだ。

男性が恋愛ドラマやアニメを見てもつまらないのは、たくさんの美女に平凡な男性が言い寄られている漫画をみて、「そんなわけがない」と女性が思うのと同じで、恋愛ジャンルには、非現実的に感じる部分がとても多いからだろう。

要は男性目線の創作物か、女性目線の創作物かによってウケが違うのは当たり前だということも分かってほしい。性で分けられる感覚の違いというのは確かにあるのだ。

では冒頭の『情熱的な恋をして、愛され、結婚する。』は一体どちらの理想だろうか。

答えは、どちらも持っている理想だと言える。なぜなら、結婚願望を持っている人の多くは、ゴールが結婚であると考ええるからだ。

ここで間違っていないのが、日本人全員がその願望を持っている訳では無いという

こと。そして、このような理想を持っているかと聞いた時、どちらかの性に偏るものではないということをお願いしたい。

私たちの親世代における結婚は、したいという理想より、しなければならぬという義務だった。

「結婚をしないという選択」＝「結婚出来なかったから結果的にそういう選択肢を取るようになった」という考えが普通にまかり通っていたのだ。

よくもまあ世間話のように、結婚適齢期を迎えると、やれいい人はいないのか、やれ近くにいい人がいるから紹介しようかと、目の前の相手を幸せにするために世話を焼いてくれる。

果たしてそれが幸せになつてもらいたいからなのか、嫌味なのかの真意は分からないが、とにかく、親世代の人たちは結婚というゴールのために若者を動かそうと必死になる。生物学的に子孫を残すという考えが根強いのは素晴らしいことだが、いささか面倒に感じる。結婚しなければいけないという思想を否定するわけではないが、押し付けがましいのはど

うかと思う。

江戸時代までさかのばれば、結婚相手より先にその両親と会うなんてことは当たり前だった。つまり、嫌味もとい幸せのお手伝いであるこの風習というのは、もともと結婚には親の許可が必要だったからこそ、周りがその親にいい人を紹介して、親という第一関門を突破するためにできたものだろう。

そもそもなんだ？いい人って。その人がいい人かどうかは本人が決めることだろう。

しかし、風習は今も根強く残っていて、早ければ小学生の時点で「好きな子いないの？」なんて聞かれる始末だ。……それは許してほしい、照れている子どもは総じてかわい。

異性を好きになることが大多数であるけれど、それを「普通」という名前で呼んで少数をなかつたことにしていたのが親世代だ。最近ようやく「普通」という言葉が取っ払われるようになったが、それでも小さなころから恋愛事情を聞かれる風習の中に身を置けば、少数の人間は肩身が狭い。まるで異性と恋愛をして、付き合うことが教科書に載っている正解であるように風習によって教え込まれているようだ。ようだ、ではなく実際にそう

のかもしれないが。

ここで今までの全てを否定するようだが、恋愛している人が必ず結婚のために恋愛しているのかと言われたら、それは完全にノーだと言える。結婚と恋愛は今も昔も別だ。

家同士の結婚が当たり前の時代では、恋愛は浮気であることがほとんどだった。もちろん婚約した後に相手を楽しむようになった夫婦もいただろうが、家庭を持ちながら他に恋人を作るとするのは、そこまで珍しい話ではなかった。なぜなら、家同士の縁を作るための結婚であり、恋愛結婚ではなかったからだ。

正直、今の時代でも家のための結婚が全くないとは言いが切れない。私達庶民は知らないだけで、一家で会社を経営している人や、天皇家などは恋愛結婚のみで相手を決めるのは難しい事情もあるのだろう。

では、現在のように結婚が恋愛の延長線上になったのはいつ頃だろう。

つまりは、結婚という行為で責任を負わなければいけない人がなくなってきたのではないだろうかと考える。結婚によって立場が変化したり、品位を損なわれたりする人がほ

ばいないのだ。(立場の話をするとは既婚、未婚女性の立場問題につながるが、その話を持ち出すときりがないので今回は省略する。)それによって、恋愛の先に結婚があるように時代は変化した。しかし、今現在も不思議なことに、結婚と恋愛はまた別の話だ。

昨今のマッチングアプリに行きつくまで歴史は様々で、合コン、お見合い、ナンパなど様々な形態がとられてきたが、それぞれ恋愛目的、結婚目的など目的を分けてきた。

自らお見合いをしに来ているのに、恋愛だけで、結婚するつもりがない人は少なくない。また、合コンで出会った相手と結果的に結婚することはあるが、初めから結婚目的で参加する人は少数だろう。マッチングアプリでさえ、利用目的によって使われるアプリが変わってくる。

この気持ちの割合については人それぞれだろう。よく聞くのが、若いうちにはたくさん恋愛をして経験を積んでおきたい、結婚がどうかはまだ考えていないという意見だ。まあ、私自身の知り合いがまだ若いからというものがあるだろうが。

なぜ恋愛をしたいかはもはや哲学だ。生物

して、
知って、
恋をして。

マッチ

出会いがなくて恋人がいない……
周りにいい人がいなくて好きにもなれない……

そんなの言い訳だ！

自分の足で恋を探し出せ！

今どき出会いなんて、「スマホ」で探せるだろう！

なんて、努力で恋を掴める時代になって悲しみを隠せない私です。恋愛は努力しないと獲得できないという考えが普通にあるようになりましね。

いつか、きちんと生きていたら、地平線の彼方からいい人という名の運命が現れて、私をさらってくれるだろう。まだ若いし、言っちゃ悪いけど私より見劣る人だって彼氏ができているし、なんて考えていたら、今の今まできちんとした恋さえ成就せず、そんな自尊心が邪魔をしているのかな、なんて近頃は考えています。

先ほどのコラムで恋愛観とは……結婚観とは……なんて偉いことをほざきましたが、結局のところは今すぐ彼氏が欲しい！恋がしたい！に行きつくわけです。人間って不思議ですね。

私の周りの人も、大学に入って恋人ができた人が異常に増えました。というのも、私自身女子高に通っていたものですが、高校時代恋愛をしていた友人はほとんどいなく、大学に入ってからまたもなカップルというものを拝見いたしました。あれは遠くで見ると分には美しいものですが、あまりに直視しすぎると砂糖で胸焼けを起こします。そろそろアレルギー反応が出そうな勢いです。

なので、というわけではないですが、女性からの恋愛相談はたくさん受けます。その中

学的本能のみなら生殖行動を目的とすればいいものを、恋するという過程をなぜ人は求めるかという論争が勃発する。個人的には娯楽の一種なのではないかと思っている。真相が証明されることはあるのだろうか。

しかし、この結婚観と恋愛観の意識の変化というものには着実にあり、今までの話をまとめるとあれば、恋愛が結婚につながるケースがだんだんと増え、今ではそれが当たり前になり、遊ぶ恋愛と真面目な恋愛がどちらも存在する世の中になったのだろう。

しかしまた、この真面目な恋愛の定義が本気で愛することなのか、結婚する気があることなのかという点ではないところが恋愛の面白く、結婚の難しい部分なのだろう。

上手いことを言うのであれば、恋が本気であるかどうかは、愛が証明してくれるからこそ、恋愛というのかも、しれない。

でもマッチングアプリでの恋愛相談が増えました。コロナ禍で出会いどころか人とも会うのが憚られるので、ある程度プロフィールで選別し、トークで選別し、お互いの気が合っただようやく対面するのですから、効率的と言ったら効率的で、残酷と言ったら残酷です。そんなものは上手くいったか、いかなかったかで変わります。写真で選別から外される人は不憫としか言えませんが、最近では美醜でなく相手が安心できる人かどうかを写真で確認する人もいますから、大切なのでしょうかね。

身近に出会いがないのは嘘だと高校時代は思っていました。周りが森に囲まれた女子高ほど出会いがない場所などないだろうし、この場所ほど恋愛と隔絶された場所はないと思っていたからです。意味は同じですが大切なことなので二回言いました。

しかし違いますね。いい人との出会いがないのです。私の思っていたいい人ではなく、一人一人の個性にあったオーダーメイドのいい人が身近にいないのです。昔は身近で済ませるしかなく、地方など特に大きく移動しないと新しい人と出会うことなどなかったです。から、身近に大幅に下げたオーダーを出して、

GOOD

- ・共通点や趣味などを出会う前に知ることが出来るため、自分にあった人を探すことが出来る。
- ・素敵な出会いがあった。
- ・全く知らない人に出会うことで、知らない業界や知識を知れる。
- ・女性は何のサイトでも無料であることが多いため、複数のアプリに登録して相手を探すことが出来る。
- ・複数の相手とトークすることで、効率的に相手を探すことが出来る。

BAD

- ・男性側だけお金がかかる。
- ・写真加工が過ぎる人がある。
- ・実際に会う前はやはり知らない人なので怖い、緊張する。
- ・プロフィール情報を盛る人がある。(年収や職業、趣味など)
- ・業者などのサクラがいる。

まとめサイト感がぬぐい切れませんでしたね。これだけ書いてボツかなと思いつながら進めています。メリットデメリットを紹介する場合、まとめサイトのまとめ方が一番きれいで見やすいので、つい文章の組み方を真似てしまします。私の主観を入れることでオリジナリティが出ていれればいいですが、このコラムを読んでいられることはきつとボツにならなかったということでしょう。話を戻します。

ここで男性、女性問題が出てきました。課金、無課金問題です。

多くのマッチングアプリにおいて、男性は数千円の課金、女性は無課金であることが大半です。

お金を払ってまで恋を探している男性が多いわけですから、女性としては真剣度が高いと思え、安心材料の一つになるわけですが、男性として使いづらいと思うのは当然だと思います。しかし、お金を払ってでもたくさんの女性と知り合いたいと思っている男性が大勢いることの証明にもなります。逆にこれが女性だと、結婚に焦っていると思われる場合があるので、性別に関する固定概念というの



武市 あかね
たけち・あかね

2000年生まれ。武蔵野大学・文学部・日本文学文化学科。3年生。小説の創作を専攻。

なんて人いませんよね。どれだけ暇でもアンケートに答えないとはなりません。マッチングアプリアンケートは諦めて友達にマッチングアプリの良い点と悪い点を聞きました。

MD D研究所と株式会社コロブラが共同で行った、二〇二〇年のコロナ渦での「マッチングサービス・アプリの利用実態調査」によると、アプリの認知度は二十パーセント、そのうち利用率は五十七パーセントでした。統計データを乱用するとまとめサイト感が出るのでここでやめます。

ではアプリの利用率は？
MD D研究所と株式会社コロブラが共同で行った、二〇二〇年のコロナ渦での「マッチングサービス・アプリの利用実態調査」によると、アプリの認知度は二十パーセント、そのうち利用率は五十七パーセントでした。統計データを乱用するとまとめサイト感が出るのでここでやめます。



て良いも悪いも経験の内、という考えを持っている人には大変おすすです。恋愛対象ではなく、人として善い人も悪い人もアプリを使っています。最近周りに善い人しかいなくて、この世界を信用しすぎているのではないかと

意外と少ないですね。この二十パーセントは、全て大学生かなと感じるほど周りに利用している人が多いです。
正直な話、私自身一度はやってみてもいいんじゃないかなと思っています。恋愛におい

感じているなら、やばい人と会ってこの世に対する不信感を募らせるのもまた、一種の使い方でしょう。日本にいと平和ボケしていませんね。

ちなみに、私を含めた友人たちのアプリを始めた理由を聞くと、「自身が通っている学校に在籍している生徒の性別が偏っていたから。」「友人が始めたのと一緒に始めた。」「なんとなく話題だったから。」「など、きちんとした理由から適当な理由まで様々でした。年齢層が偏っているのです。このような結果になりましたが、もう少し上の結婚を視野に入れている人に聞けば変わってくるのかもしれない。

私の周りは、相手がいる人がほとんどで独り身がいなかったため、アンケートに答えてくれるマッチングアプリとかないかなと思いついていたら、雇用主と求職者をマッチングさせてくれるアプリなんかもありました。進んでいまずね。知らない人にアンケートを配布できるものはありませんでした。よくよく考えれば、アンケートに答えないからアプリいれよう！

夢の境界線

武市 あかね

気づくとそこは雨の日の渡り廊下だった。

高校の校舎から図書館まで続く渡り廊下。屋根がついていて、すぐ横は気分が暗くなるようなうっそうとした森。反対側には体育館があり、よく生徒が入り口の数段ある階段に腰かけてお昼を食べたり、雑談したりしていた。しかしこの渡り廊下は授業が終わって部活も終わる時間になると、当たり前だが人通りが極端に少なくなる。私はこの時間のこの渡り廊下が嫌になるほど好きだった。

私達だけの空間で、私と葉山が話す時間だった。

私の隣に葉山がいて、私に対して明るく話しかけている。私は葉山に答えながら、これは夢だとすぐに分かった。私たちは学校が閉まる五分前まで、気が向いたときだけひたすら話していた。本当に気が向いたときだけ、そのまま葉山の家でお泊りもした。私の高校時代、今思えばそのすべてが葉山のことでいいばいだったと思う。

私たちはこの日葉山の家で眠った。葉山は寝る直前までかっこよくて、かわいくて、素敵だった。

目を開けると真っ白い天井が写った。嫌なくらい真っ白な天井が写った。ど

んなに部屋が汚くても天井だけはすくきれいで、逆にその白を埋めてやりたくなる。この白い天井を見ていると実家のはげかけた天井を思い出す。

高校一年生の時、思いきり深夜に天井絵を描いた。両親にばれないように、寝静まった深夜に水バケツを用意して、アクリル絵の具と牛乳パックで徹夜して絵を描き上げた。美術部で描きかけた絵が大きすぎると言われて却下されたデザインだった。今は一年生だから三年生になってから描けと言われて、不満のまま夜なべして描いた。次の日お母さんにこっぴどく叱られ、次の日には業者の手によって真っさらな天井になったけど、何が青春と聞かれたらあの夜がなにより純粋な青春だった。

そういや、あの天井がすべてはげたらあの絵が出てくるのかな。そう思うと目が冴えてしまいそうで私はゆっくり目を閉じた。

目を覚ますと、職場の机で突っ伏して寝てしまっていた。結局今までのすべてが夢だったのだ。と、カレンダーを見ると十連勤の中日だった。もう一度寝てしまおうかと思ったが、私を呼ぶ怒鳴り声が聞こえて、胃が小さく縮こまった。

部長は禿げ頭だ。この会社がつるつる株式会社なら間違いなく社長であるか

のような禿げ頭。そしてその少ない髪の毛を振りかざしながらいつも私に怒鳴り散らす。あれができない、これができない、これだからお前は駄目なんだ。俺がどれだけ迷惑していると思っている。

私は赤べこみたく首を振る。毎日毎日返事をしながら首を振る。前述のとおり話なんて聞いちゃいない。考えていることなんて基本は今日のご飯とか、同居している瑞希のことだ。何一つ改善する気もない。仮にしても部長はまた他の欠点を見つけて怒鳴ることが分かっているから、意地でも直さない。部長が怒鳴り終わると私はトイレに行ってまた少し眠ることにした。

目を覚ますとまた高校時代の教室だった。この風景は見覚えがある。三年間で一番いい席を取った時のことだ。まだ話したことのない、大好きであこがれだった葉山の斜め後ろの席。葉山から私は見えないけれど、私はひたすらに葉山のことを眺めていた。

葉山は静かな人だった。美しく、凛として、真っ直ぐに見えていなかった。何でもかんでもうじうじ悩んで動かない私を見かけると、いつも話を聞いて、慰めてくれるようなお人好しでもあった。面倒見がよすぎて、一部の女子には嫌われていたが、そんなことなんて気にも留めない葉山が私は大好きだった。

目を覚ますと自分の家にいた。一回水でも飲んでこようかとキッチンに立つと、二日前からため込んでいる食器類にハエがたかっついて、とりあえず殺虫剤をまいた。電気をつけると部屋はすさまじい惨状で、ソファで瑞希が寝ころんでいて。私は掛け物をかけた後、その頭を撫でていたが、不意に声が聞こえなくなつてその体を揺らすと、眉間にしわが寄ってうめいただけで起きてはくれなかった。私は瑞希の手を握るとそのお腹に頭をうずめて眠りについた。

目を覚ますとあの渡り廊下に立っていた。葉山が私に背を向けて目の前を歩いている。私が話しかけようと近づくと、渡り廊下の向こう側から図書館司書の先生が葉山に話しかけていた。私は葉山の顔を見て、あまりの美しさに感嘆

する気持ちと、かすかな憎悪に襲われたのをよく覚えていた。私はその後を歩いていて、図書館で話している二人の後姿を見ながら、次第に涙が流れてきた。少し先生と離れて移動しようとしている葉山に涙を見せまいと机に突っ伏した。

目を覚ますと瑞希が私の頭を撫でていた。おはよう、という瑞希は笑って、今日のご飯作りのどっちだっけ、と聞いてきたから、今日はお弁当食べよう、なんて言ってコンビニまで二人で歩いた。あと一時間ぐらいで深夜帯に突入するといふのに、今日の空はやけに明るく、雲がかかった星が浮かんできて、きれいだっただ。そういえばあの絵にも星を描いたな、なんて考えていたら、瑞希は見透かしたように私の手を握って、あの日描いた絵みたい、とつぶやいた。私たちは夕飯を食べると一緒に布団に入って、久しぶりにプラナリウムをつけた。

しばらくそれを静かに眺めていた瑞希が、この部屋の天井にも絵を描いたらどんな絵になるかな、とつぶやいたが、私は何も答えなかった。もうあの日のような絵を描くのは嫌だったが、上書きする気持ちで描いてもみたかった。でもなんだか私は、最近の瑞希は変だと思ったから何も答えなかった。

目が覚めると、美術室にいた。夜だからか、外が暗かった。葉山が目の前でバケツを用意していた。あの夜の話をしたから、あの夜に来ているんだと、不思議に思った。

どこからかパイプ音がしている。気になって探してみると、水道に置いてあったバケツの中に葉山のケータイが沈み、水面を揺らしていたが、次第に動かなくなった。

私たちは二人であの日、絵を描いた。私が実家の天井に描いた絵を、三年生が使うはずの大きなキャンバスに描いた。青春がいつか聞かれればあの日で、三年間で一番の思い出は聞かれればこの日だ。バケツの用意が終わった葉山はいつもと違って凜としていなく、不安そうだった。私はその手を握ってひた

さらに隣で葉山の顔を見つめていた。葉山は誰にでも真面目で優しく、司書は誰にでも不誠実で残酷だった。

私は葉山の手をそっとおいて一人でキャンパスに向き合った。葉山は一時の間ぐらいいして、私の絵の上から星を描き始めた。葉山は美術部じゃないから、せいぜい描けてそれぐらい、未成年にできる反抗もせいぜい、これくらいだった。私たちは精一杯絵を描いた。描き終える、二人で屋上に登って、鍵を閉めて、ただただ空を眺めながら眠りについた。

目が覚めると多目的教室の前だった。司書と生徒が仲良しげに話しながら、肩を組んで幸せそうに話していた。私は、二回連続高校の夢なんて珍しいな、なんて思いながら、その二人をひっそりと覗いていた。すると、ふと人のぬくもりを感じて、すぐ横を見ると葉山が気配を消して近づいてきていた。葉山はあの夜みたいに不安そうではなく、いつものように凛として見えた。私はいつもそんな葉山を見て好きだと思ふし、素敵だと思ふけど、この時の葉山だけではどうも恐ろしくて嫌いだ。

この日、葉山に呼ばれて渡り廊下に来た。台風の日のような風が吹き荒れる雨の日で、横から雨粒が襲ってきた。でも、珍しく葉山のほうから声をかけてきて、絶対に来てほしいと言われたから、私は体育館の階段に腰かけて葉山を待っていた。

体育館の中から話し声がした。少しドアを開けて覗き込むと、葉山と司書が話していた。

私はすぐに今日が何の日か気が付いた。気が付いたが、私は、動かなかった。司書が半ば強引に葉山を振り切ってこちらに近づいてくる。私は近くにあった濡れた落ち葉を階段に敷いた。司書はドアの横に立っている私に気を取られて、不自然に並んでいる落ち葉に気づかなかった。そして滑って階段の角に頭を打ち付けた。

私はすぐに今日が何の日か気が付いた。葉山が司書の背中を押した日だった。

家に着くと連絡が来るはずだと踏んでいた。なのに、瑞希は連絡もなしに会社を出てきた。何かを見ている。あの日の瑞希のように凛として素敵だった。誰かを見ているようだった。

視線の先を追うと、あの日司書と肩を組んでいた生徒にそっくりな人が、瑞希の前を歩いていた。

私は静かに、瑞希の、葉山の背中を追った。

葉山は、二人で高校の横の森まで向かった。あの日みたいに雨は降っていない、きれいに星が見える良い夜だった。葉山は途中から相手をおぶさっていた。なぜ相手に気を使っているのか分からないけれど、見る限り寝ているようだった。森に入っていく葉山に、私は後ろから声をかけた。

「瑞希。」

葉山は一瞬私のほうを見て驚いた顔をしたが、あの凛とした美しい顔でにこりと笑うとそのまま森のほうへ足を進めた。

「瑞希、瑞希、どうするつもり、なんだ。私にも何も言わないで、どうするつもり。」

私はそう言いながら葉山の後ろを追いかけた。そろそろ寝てもいいころだった。目が覚めたらまた別の場所で、全く違う記憶。全く違う思い出の中にいるはずだ。私はそろそろ寝てもいい。こんな夢なんてこのまま見続けてもしようがないだろう。

「今日は嫌なくらい天気がいい。あの渡り廊下と美術室が懐かしい。」

不意に葉山がそういった。振り返った顔は、司書の背中を押した、あの時の顔と同じだった。

早く眠りにつきたかった。一刻も早く次の夢を見て、何もかも夢だったと、現実など何もなかったかと思った。なのに、どんなに長く目をつむっても、目の前にあの生徒を背負った葉山がいる。すぐ横には、誰もいない渡り廊下がある。

「帰ろう、瑞希。今日は瑞希の誕生日だよ。ほら、欲しがっていた財布もこ

事故であることには変わらない。私達がそのまま帰って、朝には司書が死んでいたことにも変わりはない。でも夢の中だけは、全て私のせいにしたかった。背中を押した後の葉山の顔なんて見たくなかった。

私たちはまた二人で家に帰って、手をつなぎながら静かに眠った。今日の葉山の顔はどこか不安そうだった。あの日の葉山の顔は、いつもの通りかっことくて、かわいくて、素敵だった。

目が覚めるとまた会社のデスクの上でうつぶせになって眠っていた。また部長にどやされると思い部長の席を見ると、あまり見たことのない本部のお偉いさんが、部長に怒鳴り声をあげていた。部長は返事をしながら、赤べこのように頭を振っていた。本部の人が言うには、お前の部署はあれができない、これができる、これだからこの部署は駄目なんだ、本部がどれだけ迷惑していると思っている、そんなことを言っていた。聞き覚えのあるその内容に私は、部長も人間なんだと感じながらも、この会社はそろそろ潮時かな、とも考えていた。怒りを繰り返したってなんの生産性もない。ただ不満や怒りをためる人が増えるだけだ。なぜあの売げ頭は、そんなことも分らないのだろうか。

パソコン画面の日付を見ると、瑞希の誕生日だった。変な日の夢を見ているなど思いながら、サブライズに会社の前まで行って、瑞希を驚かせてやろうと思った。そのままデイナーを予約して、数か月前からお金をためて買っておいた瑞希が欲しいと言っていたお財布をもって、定時ぴったりに退勤した。私以外みんな残業しているようだったけど、もう先がない会社で残業してもしょうがないだろう。残業代は出ないし。

私は瑞希の会社の前で退社して出てくるのを待っていた。瑞希はいつも仕事が終わると私に連絡をくれるから、連絡が来ない今は、まだ会社にいるだろうと思ったからだ。しかし瑞希は私に連絡もせず会社から出てきた。連絡を忘れていたとは思えない。瑞希は気づいてから、自分の誕生日に私が何も準備していないとは思わない。そしたら普段の日よりも細かく、何時まで

ここにある。一緒に家に帰ろう。」

昔も私の葉山、今も私の瑞希、私はただそれだけでいい。いいのに、あなたが遠い。

私がそう言っても、葉山は足を止めてはくれない。もうそろそろ目印の渡り廊下が見えなくなる。渡り廊下が見えなくなったら、私たちはもう帰れない。

「瑞希帰ろう。疲れたならその人はここに置いて行っちゃいい。置いていけばあの時みたいにうまくいくかもしれない。その人を置いて二人で家に帰ろう。」私がそういって葉山は私の目を見て言った。

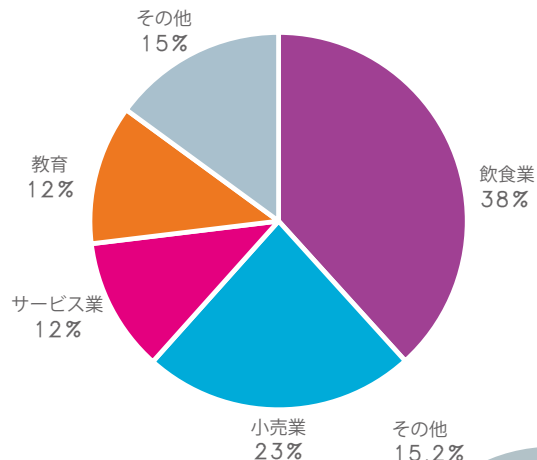
「もう夢は、見たくない。現実も、夢も、見たくない。」

そう言っ二人は、森の奥深くへ姿を消した。

気が付くと高校の渡り廊下だった。今日は晴天で星がきれいに光り輝いている。

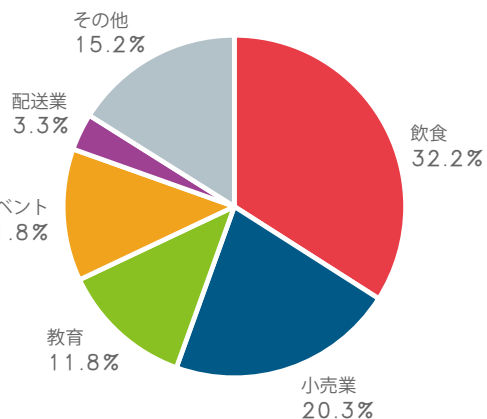
私はあの時間のこの渡り廊下が、嫌になるくらい好きだった。

Q 経験したことの あるアルバイトは？



このグラフは、嫌なバイトほど離職率が高いこと、そして経験人数は多いものの、長い期間勤めている人数は少ないのではないかと予想したアンケートの結果です。

Q 今まで1番長く勤めていた アルバイト先は？



しかしこの結果を見ると、どの業種も順当であるように感じます。個人的には、圧倒的に飲食業が求人数の割に離職率が多いのではないかと感じていたので、とても意外です。

そもそも日本人であるがゆえに、ブラックであると分かっているながらも続ける人が多いのかもしれない。この後ブラックアルバイトのアンケート結果をのせますが、そのアンケートを個別に見ていくとブラックだと思っていながらも続けている人も中にはいます。

そのアルバイトがブラックだとしても所詮はアルバイト。一生勤めるわけでも、毎日通うわけでもない。それより大切な学生生活を維持するためのお金が無くなる！なんて思っただけなら、いらないやだと言いつつやめなければならぬと思う根性は、ブラック企業をそのままにのさばらせる良い材料になっているのかもしれない。

現役大学生に
訊きました！

ブラック ホワイト アルバイト

大学生になったけど、
アルバイトどうしよう……
大変だからシフト削りたいけど
お金がなあ……

大学生にとってお金は生命線！しかし、全ての職場が自分にとって良い職場とは限りません。もしかするとブラックなんていわれる場所かも……。

しかし、ブラックもホワイトも、その仕事をその人がどう感じるかの匙加減によって変わります。規定があるわけではありません。

私が以前勤めていてブラックだと思っていた飲食店は、有休の話やされないことや、高熱でも代わりが見つからない限り出勤しなければならぬことなど、自分なりにおかしいと感じる部分がありました。

ですが、周りにブラックであった飲食店の話を振ってみると、「意外とまじな職場である」という意見が多数出てきたことに、私はとても驚きました。確かにその二点は少しおかしいと思う

が、きちんと教育もしてくれて、タイムカードもきっちり切ってくれる職場はいい方だというのはです。

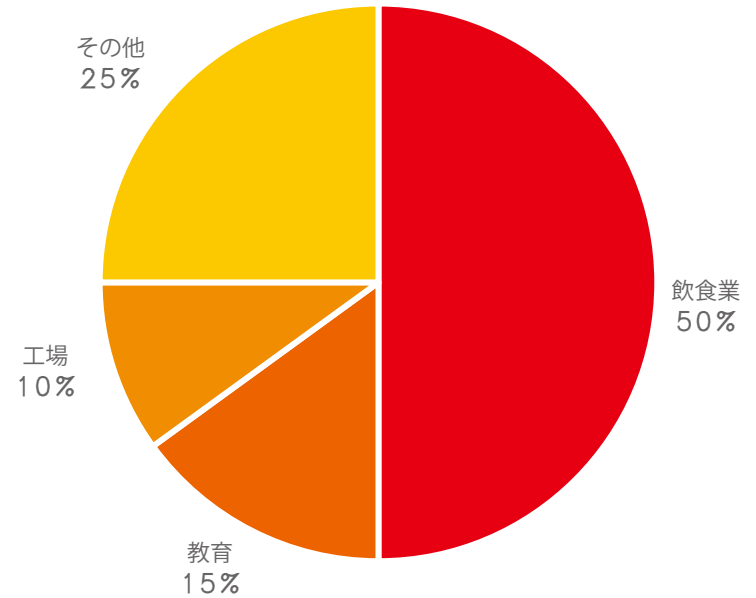
最近、ブラック企業という言葉が目につくようになってきました。そこから派生した『ブラックバイト』という言葉。ブラックバイトの経験がある人から話を聞いても、確かに私の職場はまともであったのかもしれないと感じるほど、ブラックな職場が多いことが分かりました。

そこで、独自に現役大学生にアルバイト事情のアンケートを行いました。少し突っ込みたくなるようなエピソードや、逆にホワイトな職場はこんなところだというエピソードも答えていただきました。自分に置き換えると笑えませんが、人の話はちよつとネタになる。そんなアンケートを確認してみよう。

※独自にアンケートを行ったものです。職種、職業を中傷するものではありませんのでご承知おきください。

ブラック

Q ブラックな職場が多いのは……



やはり圧倒的に飲食が多いですね。経験したことのある人が多いにしても、偏っています。それに対して、小売業が少数だったことは驚きです。生活用品や雑貨を売る小売店の接客と、お腹が減った状態で来る人に対応する飲食店の接客では、お客さんのイライラ度が加算される分飲食業はクレームが多いのかもしれない。

また、飲食店では少しでも問題を起こすと店長が責任を負うことになり、最悪の場合、営業停止命令が出ることがありますので、上司が他のアルバイト先より厳しいと感じる人が多いのかもしれない。実際に店長が怒鳴るような職場もあったようです。

Q なぜブラックだと思いましたか？

飲食業

- ・キッチンでは客から見えないため、店長が大声で叱責していた。
- ・人手不足で常にギリギリしている。
- ・ひたすらに急かされる。
- ・法律違反とやりがい搾取。
- ・明らかな人手不足での営業。
- ・時間外労働をさせられた。
- ・昇進したのに、経営悪化を理由に給料が上がらなかった。

教育

- ・勤めている人の目が死んでいる。
- ・新人いびりが常習化している。
- ・業務に関係ない私生活や過去の詮索をされる。
- ・二年働いて有休無し。
- ・給与明細が発行されない。
- ・上司へ意見しても聞いてもらえない。

その他

- ・サービス残業がある。(小売業)
- ・トイレに休憩中も行ける環境ではなかった。(派遣バイト)
- ・休みを取ると嫌な顔をされる。(娯楽施設の接客業)
- ・基本皆無口であるため何をしたいのか指示されず、何をするか分からない状態で放置された(工場)
- ・障害で入社している人に対して、大人数で囲んで責める。(工場)

法律違反は普通にダメですよ？ と思っていました。これを見てみると法律なんてあってないようなものなのかもしれませんが。もちろん労働に関してのみ

クレームを言われ続けたのに店側が対応してくれないなど、客に関するエピソードも来るのではないかと思います。店長や上司に関するもの、また店側の制度に関するものしかないようです。普段生活していて、それなりにクレーマーというものを見かけるにもかかわらず、客のせいにならずあくまで店が悪いという感覚はこのアルバイトの時に叩き込まれるのでしょうか。

高いレベルの接客や業務を行うためには、その分従業員に質の向上という名の無理を強いる必要があると思います。そんなことを言うと、スポーツ強豪校には体罰や怒鳴り声がないと強くなれないと言っているようで、多方面から怒られそうに恐ろしいですが、結局、簡単に質を上げるには権力を持っている人間が一方的に押し付けて、無理やり言うことを聞かせる方法が早道です。その権力者の経営知識が正しい場合、それでどうにか営業できてしまいます。

強豪校とアルバイトの違いは、教育機関か仕事かの違いです。教育は教える

なければいけませんから、部活だけ育ててもダメなわけです。

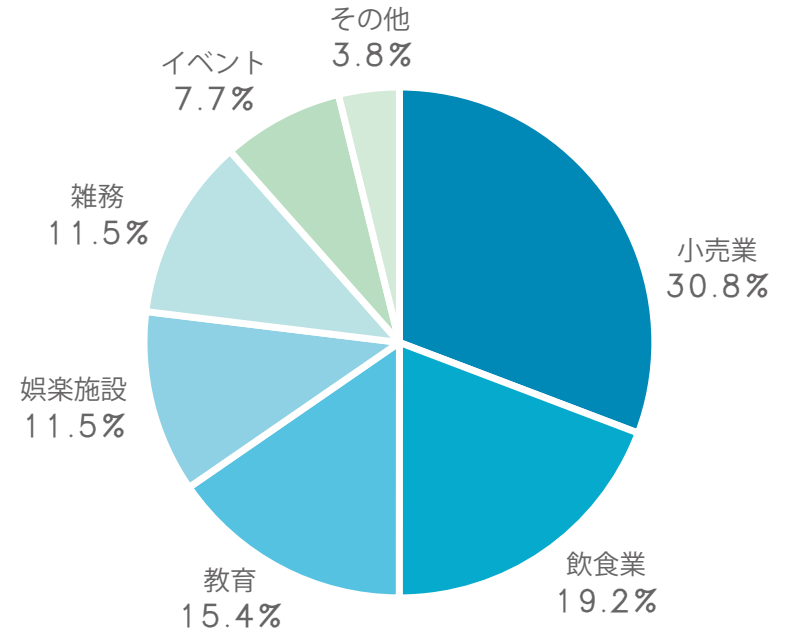
しかしアルバイトは仕事です。仕える事と書いて仕事といえます。その職に仕えてお金を貰っているのですから、権力者からの無理強いは大した問題ではないという感覚が世間でできてしまっているのだと私は思います。これはブラック企業にも同じことが言えるとは思いますが。

もちろんブラックな職場は一個でも少なくなっただけです。しかし店長という立場の方は、店の経営を考えつつ、教育の仕方を専門で学んできたわけでもないのに人に仕事を教えて使えるようにしなければいけないので、手一杯なのかもしれません。

常に怒鳴っている人を見るとその心身の状態が心配になります。しかし結局は自分がかわいいので、自分がそんな店長に当たったのなら、この職場が無くなるともに亡くなってしまえば…….とか思っています。このような思考回路が店長を追い詰めているのかもしれない。ごめんなさい。

ホワイト

Q ホワイトな職場が多いのは……



ホワイトな職場では、ブラックな職場では少数だった小売業が多くの割合を占めています。しかし飲食業という回答が一定数を占めていて、結局は環境だということかもしれません。しかし、小売業に関しては飲食業よりも勤めている人が少ないのに、圧倒的ホワイトの割合が大きいわけですから、ホワイトな職場が多いと言っているでしょう。

Q なぜホワイトだと思いますか？

小売業

- ・シフトの融通が利く。
- ・休みたいたときに休める。
- ・突然休暇申請をしても、嫌な顔をされない。
- ・人間関係が良い。
- ・法律を守っている。
- ・コロナ禍でも、パートもアルバイトも分け隔てなく無料券や割引券を配布してくれた。
- ・客足の少ない職場だったため、シフトが多くても仕事量が少なく、負担が少なかった。
- ・優しい人が多かった。

飲食業

- ・社員さんが優しい。
- ・代わりを用意せずに休むことが出来た。
- ・有休とバースデイ休暇があった。
- ・他のバイトの休みが出て負担が大きかった際、多めにまかないが支給されるなど、ケアをしてくれた。

教育

- ・仕事の相談も、休みの相談も嫌な顔せずに聞いてくれる。
- ・時給がいい。
- ・シフトをコマごとにいれられるので、融通が利いた。
- ・新人研修が丁寧。アルバイトと社員を同じように扱い、教育・指導してくれる。

その他

- ・子ども相手の娯楽施設だったため、驚いた反応や喜んだ反応を身近に見ることができて、自分も良い気持ちになった。
- ・（娯楽施設）
- ・急かされない環境だった。（消毒作業）
- ・作業の進み具合によって、早上がりできた。（交通整備）

- ・ライブの開演中は物販を買いに来る人がほぼいないので、働いていないのにお金をもらえた。（ライブの物販販売）
- ・コロナで臨時休業になった際、休業手当を出してくれた。（映画館）
- ・残業、無理なシフトがない。（遊園地）

「ブラックな理由として挙げられたものが満たされているからホワイトである」という意見が多数見受けられます。結局法律を守って、嫌な顔をせずに対応してくれるところはホワイトと言っているのでしょうか。働きやすい場所であると感じる必須の項目だからこそ、法律で定めているのかもしれない。

頭ごなしに、この業種はブラックでこの業種はホワイトだ、と言い切ることはできません。結局は出会いであり、入ってみたいと、どのような職場なのかは分かりません。しかし、ホワイトでもブラックでも、経験したことや耐え抜いたことは、間違えなく自分の力になりますし、

しっかりと学生時代でアルバイトをこなすことで、社会人としての基礎を築くことが出来るのではないのでしょうか。

出来るだけホワイトな職場で……など考えても、自分なりのホワイト基準、ブラック基準を構築しなければ、仕事に忙殺されて思考を奪われます。アルバイトの段階でそのような基準が構築できると、社会に入って役立つかも知れませんね。

岡本太郎と僕

僕がモチベーションの起爆剤としている人物。岡本太郎。私は親しみと敬愛を込めて「TARO」（ローマ字が重要）と呼んでいる。もし彼のいない世界で生きていたなら、私はきつとさらにつまらない男として余生を過ごすだろう。

私は、祖父母の家を訪れる度に棚やタンスを無意識のうちに漁る癖があった。それも、昔の服や本を掘り出して広げて見る瞬間が、時の止まった物体に埃が落とされ、時間が再び動き出す気がしてならないからだ。古着に対しても、以前この服を着ていた人をあえて想像しながら着ることがある。そして、もう一度息を吹き返したように感じ、まるで自分が救世主になったかのような優越感に浸ることができる。

偶然見つけた祖父母が大阪万博を訪れた時のスタンプコレクションとパンフレット。徐に開こうとするが、年季が入った紙のせいなのか紙と紙が引つ付いて開かない。ようやくの思いでペリペリとめくると、いくつかの建築物と共にスタンプが押されている。しかし、目を惹かれたものは月の石やバビリオンではなく、太陽の塔だ



Q 驚いたことなど、是非聞いてほしい！というエピソードを教えてください！

- ・口コミ欄に悪口を書かれた……。 (小売業)
- ・過去に運動部に所属していても、必ず飲食店の接客に向いているわけではない！ (飲食業)
- ・忍者の給料は現金ではなかった。 (娯楽施設)
忍者の給料は商品券だったようです！
- ・お金を投げつけてくる人、商品を粗末に扱う人など、世の中には様々な人がいると感じた。 (小売業)
- ・「コロナ禍で接触を避けるため、塾の授業をオンラインにするからシフト入れられないかも」という話は受けていたが、半年後、急に解雇についての書類が郵送されてきた。一言連絡あっても良かったのでは!? (教育)
- ・キャベツとレタスの違いが分からない後輩がいた。後にも先にも彼だけだと思う。 (飲食業)
- ・パン工場でパンの焦げを確認する作業を8時間していた。パンと友達になれたような気がした。 (工場)
- ・学生バイトで店が成り立っていたことに驚いた。学生がいなくなったらお店が回らなくなると感じた。 (飲食業)

アルバイトで驚いたこと、他人に言いたいことを募集しました。予想もつかないエピソードが多く、個人的にはこのアンケート結果が一番面白かったです。

アルバイトと言っても仕事は仕事、日本で働くというのは環境や客層が何より大事です。また、学生生活という人生で一番短く楽しい時間を、より自由に過ごすためにはお金が必須です。楽しい学生生活にアルバイトは切っても離せません。

お金以外でも、大学生にとってアルバイトは社会に出る前の練習でもあります。ストレスのかかる社会に採まれる前に、短い時間で様々な業種をお試し体験することが出来ます。私も大学に入学した時には児童教育に全く興味がありませんでしたが、短期の学童クラブアルバイトを経験して、保育士資格を取って就職したいな、と感じるほど興味を持ちました。

永年就職という考えが減少してきた現代でも、長い期間働くことになる職場を社会経験なしで決めるというのは困難なことです。一つの職場で長く働く経験も、たくさんの職場を経験するのも、最終的に一つの仕事に就くための大きな糧となることでしょう。

ですから、文句を言いつつ、愚痴を言いつつ、楽しい学生生活のために働いて、短い青春を最後まで謳歌しきりましょう。社会に仕える前の最初で最後のあがきとして、ね。



った。インパクトのある造形と、大阪万博の屋根を突き破る大きさを誇った太陽の塔を、パンフレット越しで眺めていたことを覚えている。

しかし、この出会いはきっかけに過ぎず、僕の周りには岡本太郎に関わるものが偶然にも多かった。もう何度見たかわからない「クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶモーレス！オトナ帝国の逆襲」、「20世紀少年」にも登場する太陽の塔と言う奇妙な物体がただ純粹に好きだった。

次第に岡本太郎の本や言葉を漁るようになった。岡本太郎の言葉に、自分にはない自信と力強さを感じ、ニヒリチックで色のなかった価値観が色付けされ、少しずつ染まっていく気がするのだ。どっぷりハマっていた学生時代の自分は今思い出すと恥ずかしいが、尖っていたかも知れない。決め台詞のように物事を語り、有言実行する岡本太郎にルサンチマンの心と憧れがあった。結局それは、尊敬に変わった。

岡本太郎のエッセンスが体内に加わると、どうしても気分だけは強くなったようになる。側から見れば、何も変わったことはないが、東京でも人混みに怖じけずに

堂々と歩ける感覚に近い。

バンドをやっていた時は歌詞に岡本太郎の思想を投影しようと試みたが、組んでいたバンドの系統に合わずに断念した。現在進行形で、小説を書くときにもおそろく投影できていない。僕の小説スタイルは、客観的に映像として想像すると、モノクロ世界な気がするからだ。僕の好きな岡本太郎や岡崎京子は原色の色味が強い存在として心にある。なので、自分の好きなものや影響を受けたものを文章で引用して脚色を染色している。

そして、年二回帰省で京都に帰るときは、どちらかで太陽の塔に行くことにしている。実際に訪れ、嘘みtainな話だが元氣玉のようにパワーを貰っている。特に太陽の塔で見て欲しい部分は後ろにある「黒い太陽」だ。過去を表しているとされる「黒い太陽」は、あえて後ろにあることも想像力をかきたたせるようで好きだ。

自分の好きなものを語ってしまっていると、見透かされてしまう気分になるのでこまめにしておくが、最後に心から太陽の塔がバビリオンにならなかったことを嬉しく思う。



HAZE

2022年1月13日

初版発行

・著者

吉田 祐志
土田 結加
武市あかね

・発行元

鳥華社

武蔵野大学文学部日本文学文化学科

・授業名

日文特別ゼミⅣ

・担当講師

上田 宙

本作品に関するご意見、ご感想はこちらの連絡先まで

h003553@ptf.musashino-u.ac.jp 上田 宙

本書を無断で複写複製、転載、データ配信、オークション出品等することを、固く禁じます。

編集後記

記事を書いたのも、人からもらった記事を編集したのも初めてのことで、正直きちんと完成できるか不安でした。書き終わった今でも内容に自信がもてず不安ですが、当初想像していた以上のものはできたかと思います。

武市あかね

「本づくり」のなにもかもが初めてでした。鳥有書林の上田さんに負んぶに抱っこ……とまではいきませんが、丁寧に一から教えていただき、3人でなんとか完成までやり遂げることができました。

今回はじめて触ったインデザインはいまだに使いこなすことが出来ませんが、編集はとても楽しい！本当に楽しかったです。最初に手を付けた記事なんか、三日三晩パソコンと睨めっこし続けても飽きなかったです。全部で6つの記事を編集させていただきましたが、どの記事にも愛着が湧くほど、こだわりが詰まっています。

私が書いた文章が、撮った写真が、編集した記事が、一冊の本になる。こんな貴重な体験が出来たことを大変嬉しく思います。

大学生を読者ターゲットとして作成しましたが、多くの方に読んでもらえると嬉しいなと思います。

土田結加

日文特別ゼミⅣの「HAZE」Vol.1 をお読みいただきありがとうございます。

一年を通して冊子作りの基本や、編集ソフトの使い方がどこから学んできました。慣れない部分もありましたが、私たち一同、一年間尽力して冊子を制作してきました。

今回、取材にご協力いただいた皆様、当ゼミの先生である上田宙先生には心より感謝申し上げます。それを踏まえ、本誌が多くの方に読んでいただき、有益な刊行物になることを心から願っております。

吉田祐志



2 021000 000000

